公認会計士「研修出向制度」体験者リポート

vol. 1　取材・文／南山武志　撮影／刑部友康

新日本有限責任監査法人が昨年スタートさせた、一般事業会社への会計士「研修出向制度」。本制度を活用し、自己成長に励む公認会計士たちのリアル・リポートをお届けする。

最高の知見が積める制度と確信。出向1年目を終え新たなステージへ

花王株式会社　会計財務部門
奥田祐也●30歳

「ビジネス」を知りたくて出向に手を挙げ続けた

——監査法人時代は、どんな企業を担当していたのですか？

奥田　主に国内のメーカーの会計監査に携わりました。IPO（新規株式公開）のお手伝いをしたこともあります。大学を出てすぐに監査の仕事に就いたのですが、当然のごとく初めは戸惑うことばかり。公認会計士の資格は取ったものの、監査がどういうものなのかなど、ほとんどまったくわかっていませんでしたから。

やりがいを感じるようになったのは、ある程度仕事がわかってきてからですね。たとえば同じメーカーでも、業種などによって、仕事の中身はぜんぜん違う。そういう、いろんな個性を待った企業と広く接することができたのは収穫でした。普通は、就職すればその業界一本槍で、20代で多種多様な企業の中をのぞくことって、ないでしょう。

——出向の話があった時の率直な感想を聞かせてください。

奥田　僕の場合は、まさに「渡りに舟」。この制度ができる前にも、数は少ないのですが、事業会社に出向する例があって、「機会があれば、ぜひ僕も」と、手を挙げ続けていました。

仕事がわかってくるにつれ、会計の知識だけではやっていけないという気持ちが、日に日に強くなったのです。話をする相手は、現実のビジネスに精通しているわけです。にもかかわらず、こちらが知識ゼロでは、心の底から信用してはもらえないのではないかと。いろんな企業の中をのぞいたといっても、しょせんそれは「広く浅く」なんですね。一度しっかりした事業会社に身を置いて、現場の「ビジネス」を勉強したかった。ちなみに、監査法人には、事業会社で働きながら資格を取って入社してくる会計士もたくさんいます。そういう人は、話をしていてもやはりちょっと違う。自分にはない、ビジネスを知る深み、厚みのようなものを感じるんですよ。

——花王では、具体的にどのような仕事を任されているのでしょう。

奥田　会計財務部門に所属して、IFRS導入プロジェクトの一員として働いています。花王では、この部門の8人とその他管理部門を含めて総勢50名が、IFRSに携わっています。「収益」「固定資産」「人事」「研究開発」などのチームがあるなか、私に期待されていることは、会計の専門家としての視点も交えて全体を俯瞰し、導入に向けた筋道をプロジェクトメンバーと一緒に考えていくことと感じています。

出向して1年ほどになりますが、プロジェクトは準備段階から「離陸」したところ。ただ、「企業の何たるかを知る」という私自身の目標に照らすと、正直「まだまだ」の1年でした。ビジネスの本質とは何か、取引の背景にあるのは何か、研究開発の意図とは——。そうしたことを常に念頭に置いて仕事をしなければと、頭ではわかっていても、ついつい「数字」をとおして見てしまうのです。改めて、ビジネスをどうとらえるのかというのは難しいテーマだと、痛感させられました。

出向してわかった企業活動の本当の姿

——実際に、花王という企業の社員になってみて、感じたことは？

奥田　新日本からは、僕と同時期に計18名が、この制度で出向しました。基本的に出向先を選ぶことはできないのですが、見せてもらったリストに花王の名前があって、「ここに行けたらいいな」と。夢がかなってラッキーでした。

IFRSプロジェクトにかかわってよかったのは、経理だけではなく人事とか研究開発とか、広くいろいろな部門の方々といっしょに仕事ができること。最初に、会社の全体像を俯瞰して見るのには絶好のポジションでした。

そんな仕事を通じて驚いたことの一つは、花王という企業の「消費者目線」の徹底ぶり。コンシューマー製品を製造販売しているのだから当たり前と言ってしまえばそれまでですが、営業はもとより人事、経理まで「消費者のために」という視点が貫かれている。こうした企業風土のようなものは、監査法人で働き続けていたら、きっとわからなかったと思いますね。

——出向期間は3年です。2年目、3年目に向けた抱負を。

奥田　「会社のことをよく知らないから」という甘えは、これからは通じません。花王の社員として、どこに出ても恥ずかしくない仕事をしたいですね。しっかり「消費者目線」を持って。

それから、今自分で見ているのは国内だけなのですが、いずれ海外もというような話になったら、そちらにもしっかり貢献したいと思っています。

——3年の研修出向を終了した時に、その会社に残るという選択肢もあると聞いています。

奥田　「帰ってこい」「残ってほしい」と、双方から求められるのが理想です（笑）。出向当初にあったのは、「事業会社を経験して監査法人に戻れば、そこで伝えられるものがあるはずだ」という思いでした。ただ、もし花王に残ってもそれが伝えられる状況が生まれたら、考えは変わるかもしれません。

——あとに続く人へのメッセージを。

奥田　〝第1期〟でしたから、確かに多少の不安はありました。でも今、最高の学びの場を手にした自分がいます。外に出てビジネスの本質を見てみたい会計士にとっては、間違いなく自己成長をもたらしてくれる制度です。そういう気持ちが少しでもある人は、臆することなく手を挙げるべきです。

Yuya Okuda Profile

1981年5月1日	東京都町田市生まれ
2003年10月	公認会計士第二次試験合格
2004年3月	東京大学経済学部卒業
4月	中央青山監査法人入所
2007年8月	新日本監査法人入所
2010年6月	花王株式会社へ出向

家族構成＝妻

出向受け入れ企業の声

IFRS適応プロジェクトを専門家視点で見てほしい

花王株式会社
会計財務部門 取締役 執行役員
三田慎一氏

出向を受け入れるに当たって日本CFO協会にお願いしたのは、「通常の実務ではなく、われわれとともにIFRSの導入プロジェクトに取り組み、それをリーダーとして推進できる人材が欲しい」ということ。そうでなければ、3年間監査法人でのキャリアを「犠牲」にして来る本人のためにもならない。

プロジェクトにおける奥田さんの役割は、IFRS導入のために必要な論点の整理。それを花王の実務に落とし込んだ時にどうすべきかを、それぞれのチームの人間が考えていく、というイメージだ。彼の会計士としての専門性はいかんなく発揮されており、われわれとしても勉強になることが多い。

あえて付言すれば、制度が会計士の「リストラ」を企図したものだという見方があるが、それは違う。リストラ目的ならば、奥田さんのような優秀な人間を出向させるはずがない。